

大学における教員評価について

昭和62年6月16日

国立大学協会

第1常置委員会

●大学における教員評価について／目 次

概 要	1
I ま え が き	2
II 教育の評価	3
III 研究の評価	4
IV 大学の管理・運営に対する評価	5
V む す び	6

参 照 文 献	7
---------	---

別添資料 1 学生による授業評価（ランカスター大学）	9
2 学生による教師評価（カリフォルニア大学 バークレイ校教育学部）	10
3 研究評価分析用フォーマットの例	11
4 大学の評価に関する主要参考書リスト	13

別 紙 「評価に対するアンケートまとめ」	16
----------------------	----

委員会名簿

(概要)

従来、我が国では、全体としての大学評価はいうまでもなく、個々の大学教員の研究・教育などについての評価は、本質的に大学にとってなじまないものであるとされてきた。しかし、大学における教育・研究と大学教員に対する社会的期待の増大に伴い、大学における評価の問題を避けて通ることはできないとの認識から、第1常置委員会は、数年前から「大学における評価」の問題を取り上げ、最近は特に小委員会を設け検討を行ってきた。その結果、第1常置委員会では、一応以下のような「見解」を取りまとめるに至ったので、その概要を示すことにする。

1 評価の目的

大学における自己評価は、研究者にとって自己研鑽・自己啓発につながり、その結果、教員の研究・教育活動等の活性化、さらに大学の新しい活力をもたらすことを期待して、実施するものとする。

2 評価の原則および方法

大学における自己評価が学問の真の発展をその本来の目的とするものであることに鑑み、学問の自由、したがって研究・教育の自由を侵す結果となることは、厳につつまなければならぬ。

大学における教員の教育・研究などの評価が他の主体によって実施される場合には、学問・教育に対してマイナスの結果が生じるおそれがある。したがって、大学人は、大学自治を生かすためにも、他から評価を強いられることなく、自らの意志によって、この問題に対処すべきで

ある。

また、学問の性質上、評価の基準は学問分野に応じ、評価事項の性質に即し、大学人によって自律的に定められるべきである。

かくて、大学評価は、このような原則に即した「大学教員の自己評価」であるべきである。

3 評価の姿勢

評価は、できるかぎり客観的であり、第三者もその評価基準、研究者・教育者の意図・努力・苦心等を理解しうるものであり、また、外部の批判にも十分耐えうるものでなければならない。そして、これにより諸外国における場合と同様な評価効果がえられるよう、個々の研究者がその基準を設定することが望ましい。

上記の趣旨に基づき、各教員が、研究・教育などにおける内外の評価例等を参照して、自らの評価について直ちに検討を開始するよう要望することが、目下の急務であると考えられる。

I まえがき

国立大学協会第1常置委員会は、すでに報告書「大学の在り方について」の中で大学の評価についての全般的な見方・考え方を整理し、その意味を検討した（昭和60年6月）。

また、昭和61年8月18日には“大学における評価”というアンケート調査を行い、95大学中93大学から回答を得た。これらの回答は、第1常置委員会によって、別紙のようにまとめられた。

第1常置委員会は、その後もこの問題について、小委員会を設け、評価に関する種々の報告あるいは論評などを収集するとともに、“自己評価”の内容について検討してきた。

「大学における自己評価」は、諸外国においては比較的長い歴史を持っており、最近では、我が国においても、一部の大学において実施されるようになってきている。

われわれは、大学の評価の目的はあくまでも研究と教育の活性化にあると考え、研究の真の発展を期待し、評価は“自己評価を主体として行う”ことを提言するもので、以下に先述の報告書「大学の在り方について」の第5章“大学における評価の問題”の論旨をふまえてその具体案を示すことにする。

自己評価の評価項目には、教育・研究・大学の管理運営などの項目が挙げらよう。以下に、順次各項目の評価内容を述べることにする。

II 教育の評価

別添資料1, 2および参照文献5にみるように、教育に対する評価としては、学生による授業評価が国外ばかりでなく、国内の大学でも試みられている。

教育に対する教員の自己評価の視点としては、その学期の講義の立案と実施の間のギャップ、学生との対話の仕方、テストの方法、評点のつけ方、などが挙げられよう。これらの自己評価は次の学期の講義内容にフィードバックされなければならないのは当然であり、そのためにはこれらの評価を継続して実施する必要がある、このような努力を通じて教

育内容がより充実することが期待される。

これらは、教育の評価方法の一つとして検討に値するものであるが、しかし、それらについては、外国でも反省すべき点のあることも指摘されており、その利用については各大学において自主的に検討されなければならない。

Ⅲ 研究の評価

近年“大学の年次報告”が出版されることが多いが、これは研究評価というよりは“研究報告集”という性格が強く、同時にこれを義務化することによって、“報告書の執筆”のために、真に優秀な研究者の研究時間を浪費させるという欠陥を生む恐れもないわけではない。他方、研究の評価は、本来自己では行い難いという性質をもっている。現に、研究評価は、学界や Citation Index によって定まっている面があり、大学自体や研究者自身が自分から吹聴するものでもない。

しかし、研究内容を情報として社会に公表するのは研究者の義務と考えるべきであり、今や、他からの批判の道を閉ざすことは許されない時期が到来しているという見解もある。自己評価を実施するといってもここに種々の難しさがある。

われわれは、上述の難点を承知の上で、自己申告制による研究の評価様式を例示することにした。

すなわち、原則として、国立大学教員は、毎年一定の時期にその年の研究のまとめを発表することとし、この自己評価の報告は公開できるものとする。その際、協同研究者のあるときは、当人の役割・分担が明か

なようにする。しかしながら、論文についてはその発表の方式が各大学・専門分野の事情によって様々に異なるので、「報告の様式」については、それぞれの分野の特質に応じた工夫がなされるべきであろう。ここでは、二三の例を提示するにとどめる。

【研究報告の様式】

(例1) 当該年度に発表した論文リストを自分の判断によって選定し、報告する。

(例2) 論文の別刷りをまとめて、学部等の図書室に保存する。

(例3) 研究評価のフォーマットを作成する。(別添資料3)

なお、自己評価に際しては、その研究の国内外における位置づけ、その研究の現状および将来性、および目標達成の予定時期・研究遂行上の難点などを含めて説明するなどの工夫をこらすことも必要であろう。

IV 大学の管理・運営に対する評価

多くの場合、大学の管理・運営は大学自治の原則に基づいて、選挙によって選出された人物がこれに当たることとされている。その場合、大学の管理・運営業務が増大・複雑化するに応じて、一旦選出されて管理・運営に努力すると、本人の研究・教育に支障が生じることもある。とくに、特定の人物に管理・運営業務が集中したりする場合には顕著に現れる。したがって、管理・運営の衝に当たる教員に対しては、管理・運営面での活動を何らかの形で評価しなければならず、これを何らかの方式で定式化することを検討する時期にきているといえよう。

V むすび

以上、評価についていくつかの項目を挙げ、それぞれの評価ポイントを概観した。これらの項目のほかにも、国政や地域社会への貢献、学会活動、医歯系の教員の医療活動なども評価の対象とすべきであるとの意見もあるが、今回は最も共通性の高い項目に限ることとした。いずれにしても、“大学における評価”は長い間タブー視されるか、または不十分にしか取り上げられなかった。それは、大学人自身が「評価は教育や学問になじまないもの」としてきたためでもある。しかし、この間に実質的な大学評価は各方面からなされるようになっており、こうした外からの評価に対して、大学人自身が適切な自己評価の方法を示し、その実施を図ることは、大学に対する社会の期待に応えるためにも、また大学の自治を守るためにも必要であると考えられる。

われわれは、本報告が“全大学人が英知を集めて評価の問題に取り組むための素材となる”ことを期待し、ここに示した提案が各大学で自主的に検討されることを望んでいる。

【参照文献】

- 1) 「大学の在り方について」(中間報告) : 国立大学協会第1常置委員会(昭和60年6月)。
- 2) 自己評価項目 : 財団法人大学基準協会 自己評価実施方法検討小委員会(昭和61年12月8日)。
- 3) 研究の評価について :
 - (1) 研究評価のための指針 : 科学技術会議政策委員会(昭和61年9月)。
 - (2) 提案研究の評価 : 学術月報 Vol.36, No.7, p.36 ; No.12, p.26(1983)。
 - (3) 評価とその方法 : ベル研究所における評価とその方法、植之原道行。
- 4) Faculty Development (以下、FDと略記する)に関するレポート :

Faculty Development とは、学生の量的拡大、ひいては大学教員の量的拡大に対処し、あるいは大学のサバイバルを意図して良質の教育を提供し、または、研究の成果を高めようとする、Faculty(教授団)の Development (能力開発)としての活動を意味する。英国や米国では、FDは、大学教員の teaching 能力を向上するための training、すなわち大学教員の研修に重点が置かれている。

 - (1) 一般教養学会誌 第8巻、60頁(1986)。
 - (2) 「一般教育研究」のFD特集とFDアンケート調査の実施(1986.11.29)
香川大学 シンポジウム 1-5。
- 5) 学生による評価 :
 - (1) 教師と学生—授業をめぐる対決 : 喜多村和之(広島大学)。
 - (2) 学生による一般教育評価 : 田坂興亜(国際基督教大学)。
 - (3) 学生による講義評価 : 安岡高志 他(東海大学)。
 - (4) 米国・英国の大学の「学生による評価シート」例。
 - (5) 一般教育に対する卒業生の評価とAE・FD活動 : 坂井明宏。
一般教育学会誌 第9巻、1号(1987)。
- 6) 大学のランキング : The Times Higher Education Supplement(1986.11.7),
The Chronicle of Higher Education。

【別添資料】

1. 学生による授業評価（ランカスター大学）
2. 学生による教師評価（カリフォルニア大学バークレイ校教育学部）
3. 研究評価分析用フォーマットの例
4. 大学の評価に関する主要参考書リスト
(広島大学喜多村和之教授より紹介されたもの。委員会は同教授のご好意に深謝する。)

〔別添資料1〕

学生による授業評価の例（ランカスター大学）

	〔講師 (lecturer)は……〕	強く 不満	不 満	い ど ち ら な い も	満 足	強く 満足
①	教材を十分構造化して掲示している。	1	2	3	4	5
②	説明は明快で理解しやすい。	1	2	3	4	5
③	重要な教材を的確に指摘している。	1	2	3	4	5
④	常に授業の準備をよくしている。	1	2	3	4	5
⑤	担当教科について完全な知識を提示している。	1	2	3	4	5
⑥	担当教科の最新の事例を提示している。	1	2	3	4	5
⑦	学生が独立に思考することを奨励している。	1	2	3	4	5
⑧	授業に情熱を燃やしている。	1	2	3	4	5
⑨	担当教科と関連教科の関連性を明らかにしている。	1	2	3	4	5
⑩	ユーモアのセンスを持ちあわせている。	1	2	3	4	5
⑪	学生個々人の問題や感情に理解がある。	1	2	3	4	5
⑫	休講がなく時間も厳守する。	1	2	3	4	5
⑬	学生を討議に参加させるよう努力している。	1	2	3	4	5
⑭	印刷物を上手に活用している。	1	2	3	4	5
⑮	黒板やオーバーヘッド・プロジェクターの字は読みやすい。	1	2	3	4	5
⑯	講義はよく聞き取れる。	1	2	3	4	5
⑰	宿題（レポートなど）をすぐ返す。	1	2	3	4	5
⑱	宿題（レポートなど）には建設的で有効なコメントを加える。	1	2	3	4	5
⑲	クラス全体のベースに講義をうまく合わせている。	1	2	3	4	5
⑳	担当教科を学生の期待に応えたものになっている。	1	2	3	4	5
㉑	授業(教室)外でも学生との接触を厭わない。	1	2	3	4	5
㉒	学生が自己の意見を表明することを奨めている。	1	2	3	4	5
㉓	講義を実験・実習・実地作業、セミナーと関連づけようとしている。	1	2	3	4	5

〔別添資料2〕

学生による教師評価（カリフォルニア大学パークレイ校教育学部）

Student Discription of Teachers									
学生による教師評価									
カリフォルニア大学パークレイ校教育学部									
いつも そうである				ほとんど そうでない					
1 授業やセミナーで扱われている主題は、十分な準備がされ、かつアップツードートである。	7	6	5	4	3	2	1	N/A	
2 成績評価は公平で、適切な手順をふんで行われている。	7	6	5	4	3	2	1	N/A	
3 教師は学生に質問をさせやすいように努めている。	7	6	5	4	3	2	1	N/A	
4 予習を求められる教材は入手可能で、系統化され、かつ適切なものである。	7	6	5	4	3	2	1	N/A	
5 教師は学生との相談にのるためのオフィス・アワーを、適切な時間に学生のために開いている。	7	6	5	4	3	2	1	N/A	
6 教師は学生に課した宿題を、その科目の理解をひろげ、学習意欲を高めるのに活用している。	7	6	5	4	3	2	1	N/A	
7 教師は授業で、学生に批判的思考を発展させるような機会をつくっている。	7	6	5	4	3	2	1	N/A	
8 教師が要求する教科課程は、学生全体のこれまでの背景や時間的余裕を十分考慮に入れたペースで行われている。	7	6	5	4	3	2	1	N/A	
全般的意見	まったく無意味		まあ意味があった			きわめて有意義			
9 つぎに科目の内容に焦点をあてた場合この科目は本大学でとっている他の科目に比べて、どのくらい有意義でしたか？	1	2	3	4	5	6	7		
	まったく効果なし		まあまあ効果あった			きわめて効果的			
10 この科目と主題の限界や可能性を双方とも考えた場合、この教師の全体的な教育的効果をどのように評価しますか？	1	2	3	4	5	6	7		
11 この科目をとったのは必修だったからですか？	(1) _____ はい			(2) _____ いいえ					
自由意見									
1 以下の余白を使って、(a)この科目、および(b)教師の教えかた、のどこが長所で、どこが弱点であると思うか、率直に記してください。									
2 改善すべき点があれば示してください。									

〔別添資料3〕

研究評価分析用フォーマットの例
 様式G 中間評価 基礎的研究に対する分析用フォーマット

(記載上の注意)	(例)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		適切		不適切	
		(高い、充分等)		(低い、不充分等)	
1 上記例の様式のチェック欄については、適切さ（高さ、充分度等）の程度に応じて 適当と考えられる欄にチェックすること（左欄ほど適切さの程度が高い。）。					
2 上記の場合、左欄（適切、高い、充分等）以外にチェックした場合には、その理由 を補足説明欄に記入すること。					

評価項目	チェック欄	補足説明欄
1. 研究開発は研究開発計画どおり進捗したか。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 計画以上に進捗した 進捗度は極めて低かった	
2. 中間的な成果の把握 (1) 当初想定していた成果が得られたか。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 想定以上の成果が得られた 成果は極めて小さかった	
(2) 当初想定していなかった副次的な成果が得られたか。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 大きな成果が得られた 得られなかった	
3. 外的条件の変化 (1) 研究開発の対象をめぐる科学技術上の外的条件は変わったか。 <input type="checkbox"/> 変わった。----- <input type="checkbox"/> 変わらなかった。	-----	→ (変わった点)
(2) 研究開発の対象をめぐる経済社会上の外的条件は変わったか。 <input type="checkbox"/> 変わった。----- <input type="checkbox"/> 変わらなかった。	-----	→ (変わった点)
4. 研究開発計画 (1) 研究開発の目標は、適切であったか。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 適切 不適切	
(2) 研究開発の進め方（手順、手段・手法）が適切であったか。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 適切 不適切	

評価項目	チェック欄	補足説明欄
(3) 研究開発資源の配分及び研究開発日程は、適切であったか。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 適切 不適切	
5. その他研究開発推進上の問題点があったか。	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> なかった あった	<input type="checkbox"/> → (問題点)
6. 上記以外に評価すべき (されるべき) 点、その他		
記載者名：		

〔別添資料4〕 大学の評価に関する主要参考書（発行年順）

- 広島大学・大学教育研究センター 「大学における教育機能（Teaching）を考える
－第9回（1980年度）『研究員集会』の記録－」 『大学研究ノート』第50号 1981.10 93p
- 広島大学・大学教育研究センター
「大学における教授と学習 ー第10回（1981年度）『研究員集会』の記録ー」 『大学研究ノート』
第54号 1982.10 99p
- ロンドン大学教育研究所大学教授法研究部署 喜多村和之（ほか）編訳
『大学教授法入門ー大学教育の原理と方法』 町田 玉川大学出版部 1982.12 239p 19cm
参考文献：p229-239
- 民主教育協会『教師と学生』 1983 55p （IDE教育資料 第44集）
- 原 正敏, 浅野 誠編 『大学における教育実践』 東京 水曜社 3冊 19cm
1巻 大学教師の仕事 1983.10 213p
2巻 大学教育の工夫と方法 1983.11 202p
3巻 実践的大学教育論 1983.12 209p
- 慶伊 富長著 『大学評価の研究』 東京大学出版会 1984.2 291p
- W. J. マッキーチ著 高橋 靖直訳 『大学教授法の実際』
町田 玉川大学出版部 1984.3 361p 19cm Teaching tips の翻訳
- 喜多村 和之著 『大学教育の国際化ー外からみた日本の大学』
町田 玉川大学出版部 1984.12 254p 19cm 文献目録：p218-254
- 広島大学・大学教育研究センター
「日本の大学教育の現状・課題・展望ーカリキュラムとティーチングを中心にー全国大学調査報告書ー」
『大学研究ノート』第62号 1985.3 87p
- D. A. プライ著 山口 栄一訳 『大学の講義法』
町田 玉川大学出版部 1985.10 332p 19cm What's the Use of Lectures? の翻訳
- 新堀 通也著 『学問業績の評価』 玉川大学出版部 1985.12 250p
- R. ピアド, J. ハートレイ著 平沢 茂訳 『大学の教授・学習法』
町田 玉川大学出版部 1986.4 451p 19cm 巻末：参考文献（欧文） 原書名：Teaching and
learning in higher education, c1984
- 喜多村 和之著 『学生消費者の時代ーアメリカの大学「生き残り」戦略』 リクルート出版部
1986.10 245p

『大学における専門教育の改善充実について—専門教育研究委員会報告』 大学基準協会 1986.10
136p. (J. U. A. A. 内外大学関係情報資料12)

山田 圭一著 『科学研究のライフサイクル』 東京大学出版会 1986.9 209p

喜多村 和之著 『高等教育の比較的考察』 玉川大学出版部 1986.12 266p

J. ローマン著 阿部 美哉, 塩崎 千枝子他訳 『大学のティーチング』
玉川大学出版部 1987.3 358p

大学基準協会 『大学に於ける一般教育』昭和26年 1987年復刻

『香川大学一般教育研究』第31号 特集Faculty Development 1987.3

市川 昭午編 『教育の効果』 東信堂 1987

和言葉誌

- 『大学時報』
- 『大学と学生』
- 『IDE』
- 『医学教育』
- 『一般教育学会誌』
- 『大学基準協会会報』
- 『高等教育研究紀要』
- 『教育学研究』
- 『教育社会学研究』
- 『リクルートカレッジマネジメント』

洋言葉誌

- 『Assessment & Evaluation in H.E. 』
- 『Change Magazine 』
- 『College Teaching』
- 『Educational Record』
- 『Higher Education』
- 『Innovative Higher Education 』
- 『Journal of Higher Education 』
- 『Liberal Education 』
- 『Phi Delta Kappan』

Stake, Robert E.

Evaluating educational programmes: the need and the response : a collection of resource materials / prepared by Robert E. Stake. Paris : Organization for Economic Co-operation and Development, 1976. 89p.

Dressel, Paul L.

Handbook of academic evaluation; assessing institutional effectiveness, student progress, and professional performance for decision making in higher education. San Francisco, Jossey-Bass, 1976. 518p.

Miller, Richard I.

The assessment of college performance / Richard I. Miller. 1st ed. San Francisco : Jossey-Bass, 1979. xvi. 374p.

Toward reform of program evaluation; aims, methods, and institutional arrangement, by Lee J. Cronbach(et al.). San Francisco, Jossey-Bass, 1980. xxii, 438p.

Evaluation in education : an international review series / editors : Eruce H. Choppin, T. Neville Postlethwaite. Oxford : Pergamon, 1981-. v.

Educational evaluation methodology : the state of the art / edited by Ronald A. Berk. Baltimore : Johns Hopkins University Press. c1981. 168p.

Guba, Egon G.

Effective evaluation : improving the usefulness of evaluation results through responsive and naturalistic approaches / Egon G. Guba, Yvonna S. Lincoln. San Francisco : Jossey-Bass, 1981. xxi, 423p.

Dressel, Paul Leory, 1910-

On teaching and learning in college / Paul L. Dressel, Dora Marcus. San Francisco : Jossey-Bass, 1982. xxvii, 241p.

Seldin, Peter.

Changing practives in faculty evaluation : (a critical assessment and recommendations for improvement). San Francisco : Jossey-Bass, 1984. xxi, 200p.